

母

親としての勤、父親の冷静な判断がなければ、ひとり息子の人生は最悪の事態になっていたかもしれない。つかのまの気晴らしの場所をパチンコ店に求めながら、自殺も考えた青年——周囲のサポートの大切さを改めて感じさせられたケースだった。

50代夫婦と社会人1年生の3人家族。もう大人なんだからどこへ行っても自由、という考えで就職の選択は息子に任せた。夫の定年まで10年を切った。夫婦にとっては、老後をどうやって暮らしていくか、に関心が傾いていた。子育ても終わった中高年夫婦の、ごくありふれた姿でもあろう。

親への感謝と不安少々 実家にも帰れる会社には

息子のAさんも両親の考えは分かっていた。やっと自分で働いて生活ができるようになったことについて、両親への感謝の気持ちも人一倍強かった。そういう思いが行動にもつながった。親元を離れて自由にふるまいたいと思いつつ、結局選んだ会社は隣県にある製造業の会社。業績も伸びていた。車で通おうと思えば可能な地

パチンコ依存

第13回

新 相談現場からの報告

柏木 勇一

産業カウンセラー・家族相談士

子を信じた親、親に恥じる子 その心が子を窮地から救った

域だった。

大学受験の時も、いつのまにか、自宅から電車通学できる地域の公立大学を選んでいった。そのような歩みだったから、いきなり実家を離れて遠くへ行ってしまうことに不安もあった。大事に育てられたひとり息子の甘さもあつたとも言えよう。

総合職として採用された。Aさんは文系専攻だったので、総務・人事畑を希望したが、すぐには希望通りにはならなかった。営業、あるいは製造現場の管理監督者の方向も見つめながら、しばらくはいろいろ経験を積んで決めていくというのが会社の方針だった。

マイカー通勤が可能とはいっても、新入社員としては、会社近くにアパートを借りて週末は実家に帰るといふ生活を選んだ。いくらかの家賃補助も会社から出た。

**帰ってこなくなっても
「仕事が忙しいのだ」と**

そのAさんが入社して5か月。暑かった夏も過ぎて、秋風が吹くころになって、いつもの週末の実家帰宅が減ってきた。Aさんのスタートは、製造現場で工程の流れ

をつかむことが任務だった。システム保守と管理も加わった。経験の浅い新人には難しい業務だった。最初のうちこそ、実家に帰れない理由を、「忙しくて会社を休めない」「友達と遊びに行くから」と母親にメールを送っていたが、その連絡も中断するようになった。

遊びに行くにしても親に黙って行動する息子ではなかった。メールを送っても返信がなかったので、携帯に電話したが応答はなかった。母親は何かあるな、と直感した。しかし父親は「そろそろ仕事が軌道になった頃だ。難しい仕事だとも話していたじゃないか。家に帰る暇がないのも当然だ。将来を期待された人材と評価されていると考えよう」と、あまり気にも留めていない様子だった。会社のこと、は夫が詳しいから、と母親も気にしつつも何か行動を起こそうということはなかった。

会社から突然の電話 「3週間休んでいるが」

11月になって思いがけない事態になった。会社の人事から電話があった。「Aさんの様子はどうですか。自宅でゆっくり静養して

ると思いますか」。

受信器を耳元から落とすように、母親は唾然とした。何があったんだ。息子が静養？ どういうこと？ とにかく自分自身を落ち着かせるように、深呼吸を繰り返して、何とか応答した。

「息子は帰ってませんが……何かあったんでしょうか」

「そうでしたか。3週間ほど前から体調が悪いといって休んでいましたから、てっきり実家に帰っているものと思っていました。数日前の昼に同僚にアパートを訪ねさせましたが、留守だったということでしたし」

人事担当の話から「8月頃から顔色も悪く、休みがちになっていた」「出社しても眠そうにしている時が多かった」「コツコツと地道に仕事をするタイプで、今どきの若者と思ってあまり気にもとめていなかったが、周りの輪の中に入って話し合うことは少なかった」「少し休みたいと言ってきたので、病院に行くように話したが受診したかどうかは分からない」「休むことは受け入れ、実家での静養を勧めた」という経緯が分かった。

「いない」と言われたが 両親は急ぎアパートへ

やっぱり、普通ではなかった。母親は心配が現実になったことに愕然とした。アパートにもいない？ 家にも帰ってきていない。じゃあ息子は今どうしているのだ。3週間もだれにも連絡を取らないでどこにいる。食事はとっているのか。電話連絡を受けた晩、帰宅した夫とどうすべきか話し合った。夫は「とにかく行ってみよう」と語った。「どこへ？」「アパートだよ」「留守だって人事は話しているんだよ」「当てにならない。同僚がどこまで真剣に訪問しているかどうか怪しい」「そうなの？」「そういうこともある。途中でお握りと飲み物を買ってこよう」「何か分かっていたの？ お父さんは」「知るわけはないだろう。とにかく急ごう」

夫婦は車を飛ばした。夜は比較的道路も混雑していないため、意外に早く、1時間ちよつとで息子のアパート前に着いた。途中、息子が勤める製造工場の明かりも見えた。現場は2交代制と聞いている。まだ操業時間のだろう。

「息子はいる」と確信 ドアノブにお握りなど

いくつもの現場勤務歴を含め30年以上の社会人経験がある父親の予測が当たっていたのだろうか。2階建てアパート1階角の息子の部屋の窓には厚手のカーテンが張られていたが、うっすらと灯りが漏れていた。息子は中にいる。両親は信じた。母親がかけつけインターホンを押した。応答がなかった。ドアをたたいた。しかしこれにも反応はなかった。

「警察に連絡しましょう」と母親は夫に迫った。「死んでいるかもしれないし」という言葉も出た。夫は「待て、息子を信用しよう」と答えた。ここは夫の指示に従った。玄関入り口の下の隙間からメモを入れ、ドアノブにお握りと飲み物が入ったビニール袋をひっかけた。夫婦はアパートからは直接見えないうところまで車を移動させた。周辺は空き地が多く、木立ちもあって手ごろな空間に恵まれていた。夫婦は座席を倒し、毛布にくるまって車内で一晚を過ごした。どっちの提案というわけでもなく、防寒対策もちゃんとしてきたのも

幸いした。どちらかが必ず寝ないで起きている約束をしていたはずだったが、疲れていたことは確かだった。うつすらと空が明け始めた頃にどちらからともなく目覚めた。身体を動かしながら車外に出た。息子のアパートで見たものは……ビニール袋が消えていた。息子は死んでなんかいなかった。

すぐにドアを破つても押しかけた気持ちは抑え、次のようなメモを差し込んだ。「元気でいてくれたようで安心した。きょうは帰る。落着いたら家に帰ってこい。待っている」

「父さん、きょうは会社休んだら？」「そうだな」という会話をしながら夫婦は帰路についた。

苦手な製造現場の業務 意欲失い食事も進まず

夫婦の仲介でAさんに会った。複数回に及んだ電話での話し合いが多かった。電話の方が正直に話せる場合がある。

総務畑の仕事が希望だったAさんは、会社の業務を覚えていくためにみんなが経験することだからと言われても、製造現場の業務は苦手だった。パソコン操作も不慣

れでシステムに関する業務からは逃げ出したかった。

長く携わることではない、と分かっていても、夏前には自社自体業務なのか。このまま現場から離れられなかったらどうしよう」という、何の根拠もない不安が日増しに強くなった。目標がはっきりしない、期限もあいまい、という場面に直面すると、多くの働く人、とくに若者は働く意欲を失っていく。不眠状態が続き、日中職場でウトウトすることも多くなった。誰にも会いたくなくて、ひとりトイレで過ごす時間もあつた。食事のどを通らなくなり、食堂でのランチタイムもひとり隅っこで過ごした。

先輩の会話でホールへ 「スカッとする」を実感

楽しそうに食事をしながら話す先輩たちの会話に、どうしても耳が傾いた。自分のうわさをしていくのかもしれない、という疑心暗鬼が発端だった。しかし、そこで聞こえて来たのは、パチンコの話題だった。「あれはスカッとするよな」「憂さ晴らし、ストレス解

消には最高だ」という、快活で大きな声の響きがAさんから離れたかった。

そんなに楽しいなら、嫌なことを忘れることができるなら……7月に入ったある土曜日、車で遠出をした。パチンコは、友人との待ち合わせの時間待ちなどで、学生時代に少し経験があつた。幹線道路沿いの派手な看板がある店に入つた。パチンコ・スロットの機種が増えていたこと、男女の客が隙間もなく台に向かつていたことに驚いたが、店の雰囲気は以前と変わらないな、と感じた。

ここでひと儲けしようとは毛頭考えていなかった。職場の嫌な思っただけが願いだつた。何となくゆつたりと台に向かつている客がいる方向に足が進んだ。イチパチコーナーだつた。とりあえず初日だから、5千円までを覚悟した。予想よりは長く楽しめる時間を過ごした。久しぶりに何かに集中できる自分がいる感覚を味わつた。いいとか悪いとか、この先どうなるのか、などは何も考えなかつた。食堂で聞こえてきた「スカッとするよな」という言葉がそのまま自分

にも当てはまつた。

借金をしたくはないが 土日は朝から通いつめ

一回で終わるわけはなかつた。翌日曜日と同じ店に向かつた。あつというまに土日の定番になった。当然実家に帰る日はなくなつた。親には申し訳ないと思いつつ、開放感を味わう空間にのめり込んでいた。最初こそ親にはウソをついていたが、次第にそれもどうでもいいと思うようになった。

パチンコに通い始めた当初は、不思議に職場でも仕事に集中できる日があつた。先輩からは「やつと慣れてきたか」という声もかかつた。Aさん自身、仕事なんかどうでもいい、と思つていたので、みせかけの姿であることは分かっていた。集中する姿も当然長続きはしなかつた。

土日は朝からパチンコ店をはしごすることが多くなつた。節約生活で貯めていた貯金もみるみるなくなつていった。どん底に向かつていくという自覚はあつたが、改めようという気にはならなかつた。金がなくなつたらそれまで。借金まではしたくない。なぜなら、結

局は親に迷惑をかけることになる。Aさんの話の結論は、いつも「親にだけは迷惑をかけたくない」ということだった。

不安から極端な考えに 迷惑かけるより死のう

「こんな会社を選んだ自分が悪かった」「なぜ会社は希望を聞いてくれないのか」と、自分を責めたり、他人を攻撃したり、精神状態が不安定になっていく流れに陥っていることもA君自身何となく分かっていた。

自分をここまで育ててくれた親に申し訳ない、という気持ちも日増しに強くなり、10月頃から、これ以上迷惑をかけたくない、それには自分が消えてしまえばいい、と極端な考えが頭から離れなくなった。死を考えた時の心境と行動についてAさんは次のように語った。

「家族に迷惑をかける死に方はしたくない。近くの川の上流は高い崖状態になっており、そこから飛び込めば簡単かもしれない。しかし、川に流されて見つからないかもしれない。それも嫌だ。やっぱり自分の部屋で首を吊るやり方が

いいだろう」

やはり死ねなかった ホールの空間だけが

実際にネットで自殺道具を購入し、何回か試みた。しかし死ねなかった。それでも道具は捨てていなかった。どうなってもいいと投げやりになり、会社には病欠と言いつて休んだ。基本給は振り込まれたので、平日の日中もパチンコに通った。多少は儲かって金が戻ってくる日も出るようになったが、うれしいという感情もわかなかった。

しかし、店にいる時だけが、自分の存在を確認できた。台に向かっている時だけでなく、喫煙コーナーでぼうつと過ごしている時間も多くなった。A君自身は煙草は吸わない。ただ、見ず知らずの人の中で、お互い目が合いそうにな

柏木勇一(かしわざい ゆういち)

大学卒業後、会社勤務を経て、現在はEAP企業(Employee Assistance Program)でカウンセラー及び研修講師として活動。厚労省認定産業カウンセラー、キャリア・コンサルタント、家族相談士、交流分析士

ると視線は避けつつ、気まずさは通じ合うのだろう。会話のない空間でも何となく落ち着くことができた。この感覚を味わうことでも店に通う回数が増えていった。出費しないでもひとりで過ごすことができる空間、Aさんにとって、そこがパチンコ店だった。

ドアの冷めたお握りを 食べながら涙があふれ

そんな状態の時に両親が訪れた。同僚が心配して駆けつけた時は、多分パチンコに行つて留守にしていた日だったかもしれない。夜は、ひっそりテレビもみないで布団にくるまって過ごしていた。インターホンの電源は切っていた。ドアの向こうから名前を呼ぶ母の声も、ドアをたたき音も聞こえた。すぐにも会いたかった。しかし、こんなみっともない自分を親に見せるわけにはいかない。すっかり痩せてしまったし、ひげも剃っていない。髪もボサボサ。涙を抑えることができずじつと耐えた。その夜は一睡もできなかった。

深夜。時計を見たら日付けが変わっていた。灯りをつけないで玄関口に行つてメモを見つけた。何

かを入れていったのは物音で気づいていた。外の様子を伺うためにそつとドアを開けた。両親が近くに車を駐車させていることは知らなかった。もう冷たくなってはいたがお握りに飛びつくように食べた。食べながらまた涙が出てきた。その時に浮かんだことは、死ぬことはとりあえず考えないようしよう、ということだった。親に迷惑をかけたくないから死んでしまいたい、という考えから、いま死んだら迷惑をかける、と正反対の考えに変わっていた。

数日後、A君は会社に電話して「辞める」ことを告げた。どこでどうしていたのか、病気ならちゃんと治して会社に戻ったらどうかと言ってくれたが、何も返事はしないで「お世話になりました」とだけ言つて電話を切った。

精いっぱいの身支度をして実家に戻った。突然では悪いと思つて、携帯で連絡していた。母親はあつたかい鍋料理を用意してくれた。「申し訳ない。もう大丈夫だから」とだけ言つて一緒に鍋をつついた。久しぶりの家族3人の団らんだった。